

日本YMCA同盟

THE
YMCA

The Young Men's Christian Association News



No.842 2024

2024年12月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料63円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号
Tel 03-5367-6640 Fax 03-5367-6641
URL : <https://www.ymcajapan.org/>
発行人／田口 努 編集人／横山 由利亜



OPINION

世界YMCA Vision2030

—YMCAと社会をつなぐ未来へのパスポート—

日本YMCA同盟 杉野 歌子

「世界YMCAアクセラレーター・サミット2024」が10月21日から25日に開催されました。ケニア第二の都市であるモンバサに、YMCAに連なる約400人のほか、関連団体や企業、行政などパートナー団体も参加し、2022年の第20回世界YMCA大会で採択された「世界YMCA Vision2030」をさらに促進し、加速させていく（＝アクセラレート）ための学びと対話が繰り返されました。日本からは世界YMCAチェンジ・エージェントとして1年半活動したユース世代のスタッフ、ユースボランティアリーダーと同盟スタッフの私の4人が参加。世界のYMCAが高い熱量を持ち、世界YMCA Vision2030という共通のビジョンを掲げて、社会をよりよくしようと同じ方向を向き、歩んでいることを確認してきました。

世界YMCAカルロス・サンヴィー総主事はオープニングで、「2050年までに世界の人口は97億人に達する」という国連の推計について言及しました。この人口増加は特にアフリカの途上国で顕著であり、労働年齢の若者が劇的に増えることを予測しています。彼らは必ずしも安定した職業に就けるとは限らず、このことは深刻な事態を迎えるだろうと言われていました。この状況を現地で体感してほしいというのも、今回のサミットがアフリカで行われた理由の一つでした。すでに危機的状況に陥っている気候変動、AIの発達により生まれる混乱や格差、大規模な民族の移住、そして深刻化する社会の分断が危惧されている今、YMCAは内外のリソースとチームになり、グローバル社会にインパクトを与え続けなければならないと、力強く語りかけられました。

YMCAは世界120の国・地域に存在し、それぞれの地域社会や人々のウェルビーイングを実現するために事業展開しながらも、YMCAの名のもとに連帯していることが最大の強みです。この連帯が、YMCA同士の交流の積み重ねや、歴史的な経緯や緊急支援等による協力関係に留まるのではなく、各国・地域のYMCAでの事業と事業がつながること、YMCAにはない知識やスキルを持っている企業、行政、国際NGO、国連機関等と、YMCAが対等なパートナーシップを築き、協働していくこと。これらを実現させることができるのが「世界YMCA Vision2030」です。YMCAがこれまで以上に、社会をよくする、ユースをエンパワーメントする、グローバルに広がる世界大の青少年団体となるためのツールとも言えます。

2022年に世界YMCA Vision2030が採択されてから2年が経ち、すでに各国・地域では、世界YMCA Vision2030をそれぞれのYMCAの方針や計画に整合させた状況に至っています。これからは実際の推進に向けて、戦略的な事業展開や新規事業の開発へと移行していく、今まさに、その舵を取ろうという時に私たちは立っています。日本のYMCAが目指している「ポジティブネットのある豊かな社会の創造」の実現は、世界YMCA Vision2030が目指す社会の実現でもあります。世界に連なる、グローバルパートナーシップの一員であることを誇りに、日本のYMCAの活動もさらに加速していくことが期待されています。

サミット報告書

ケニアで開催された「アクセラレーター・サミット（10/21-25）」に日本から参加した3人のユースが、特設サイトで報告書を公開しています。世界のYMCAはどのように「Vision2030」に取り組んでいるのか、国連ほか他団体からはどのような期待が寄せられたのか等、現地の様子をぜひご覧ください。



被団協と広島YMCA ノーベル平和賞受賞に寄せて

10月にノーベル平和賞を受賞した「日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）」は、1956年に広島YMCAの講堂で設立され、さまざまな活動を共にしてきた団体です。

1938年、広島市の中心部に設立された広島YMCAは、少なからぬ会員が戦災に遭ったこともあり、戦後直後から被



1956年、広島YMCAの講堂で設立された被団協

爆者の手記をまとめるなど平和活動に力を入れました。被爆10年後、12歳で原爆症の白血病で亡くなり「原爆の子の像」のモデルとなった佐々木禎子さんもYMCAに通う子どもの一人でした。原爆で亡くなった子どもたちのために慰霊碑の建立活動を始めたのもYMCAの会員・関係者たちです。こうした活動の中で広島YMCAは、被爆された方々を含む多くの市民が集まる場所となり、1956年、ここで被団協が設立されたのでした。

その後も、1960年には原爆ドーム保存運動、1970年代からは市民平和行進、1980年代には10フィート運動等、広島YMCAは被団協はじめ市民団体と共に多数の活動を展開していきます。2017～2021年に行われた「ヒバクシャ国際署名」の事務局も広島YMCAが担いました。ICANのサーロー節子さんや広島県被団協理事長の佐久間邦彦さんなど現在ご活躍の方々も、青年期にYMCAに所属し、共に活動してきた仲間です。

昨年の本紙（2023年7・8月号）で県被団協の佐久間理事長は、ご自身の体験をふまえて「YMCAには他者と交流して理解し合う、戦争はしない。そういう若者を育ててほしい」と語られました。広島YMCAはこの度の受賞を喜ぶと同時に、核兵器の脅威が増している世界の中で、これまで被爆者から寄せられた声や共に歩んだ道のりを思い起こし、これからも平和へ向かって尽力するよう決意を新たにしています。

広島YMCA 中奥 岳生

*なお広島YMCAは、12月11日にノルウェーで開催されるノーベル平和賞受賞式に、被団協や被爆者たちと共に参列することになりました。詳細は今後ホームページ等でお知らせします。

能登半島豪雨災害 雪が降る前に 一人でも多くのボランティアを

9月21日の豪雨災害以降、全国のYMCAはスタッフや学生、会員、ボランティアリーダー等を輪島市町野町に派遣し、泥かき作業を続けています。派遣先は、輪島市の町野町や南志見地区でボランティアコーディネーターにあ



9月下旬から11月5日までに9YMCAから169人が現地作業にあたりました。

たっている「まちなじボラセン」。地震後に、YMCAが避難所運営にあっていた中学校を拠点に地元の有志が立ち上げたもので、YMCAは11月5日までに延べ170人を派遣。同ボラセンのボランティア約1000人の内、1割以上がYMCAとなっています。

作業したボランティアたちは、「泥が重たくて、作業に時間がかかった」と口をそろえます。「数人で作業しても、一日で家一軒の泥かきがやっとだった」「雪が降る12月までに片付けないと大変だ」。誰もが焦りと危機感を募らせています。

1月の地震後は道路が寸断されたこと等から、石川県ではボランティア受入れを制限する動きがありました。今も地域によって断水が続く、泊まれる場所は多くありませんが、道路が開通したため通いの作業は可能です。

「二重災害」と言われる被災者のショックは大きく、できるだけ早く豪雨前の状況に戻すことが望まれます。「半日でもいいから来てほしい」。被災者からは悲痛な声が寄せられています。YMCAは皆さまからお預かりした募金をもとに、12月までボランティア派遣を続けてまいります。引き続きご協力を願います。

能登半島地震・豪雨 支援活動 ▶



パレスチナの平和を願って、 オンライン祈禱会に90人参加

イスラエルによるガザ攻撃が続く中、10月31日に3回目となる「平和を願うオンライン祈禱会」を開催。国内外の会員や関係団体など90人が参加しました。ベツレヘムで「オリーブの木キャンペーン」のゼネラルコーディネーターを務めるミラド・ハイエックさん（=写真）



も参加し、極限的な人道危機状況が続く、活動も思うように進められない現地の厳しい近況を訴えました。またレバノン出身で世界YMCA同盟会長のソヘイラ・ハイエック氏も、ガザ同様にイスラエルによる攻撃で多数の避難民が発生しているレバノン情勢を報告。現地YMCAの支援活動についても紹介されました。

メッセージを担当した山下壮起牧師（日本キリスト教団阿倍野教会）は、アフリカ系アメリカ人によるパレスチナ連帯活動等の紹介を通して、日本にいる私たちにも連帯の回路が通じていることを説かれ、パレスチナの自由と解放そして正義と平和の実現のために祈りを合わせました。

ほかに、学生YMCA有志によるパレスチナ支援のための映画上映会についても報告がありました。日本のYMCAは、パレスチナで困難な状況に置かれている仲間たちのことを忘れず、連帯の思いを伝え、具体的な支援の働きを今後も続けていきます。

日本YMCA同盟 田附 和久

教派を超えたキャンプ開催 京都YMCA「第1回教会合同小学生キャンプ」

コロナ禍で途絶えてしまった地域のつながりを回復しようと、昨年から京都YMCAは隔月でキリスト教系の各種団体と懇談会を開催しています。そこで聞こえてきたのは「子どもが減って教会学校のキャンプが開催できない」という教会の声でした。教会学校は、「子どもの教会」とも呼ばれ、礼拝のほかにクリスマス会などのイベントも行って子どもたちが楽しく集う場ですが、近年は子どもが減り、行事も成り立たない教会が増えています。

そこで京都YMCAはキャンプ経験を活かして「教会合同小学生キャンプ」を主催。もともとYMCAはキリスト教を基盤としながらも宗教の枠を超えて活動する団体であることから、日本キリスト教団草津教会をはじめ日本聖公会奈良基督教会など、教派も地域も異なる7つの教会から約30人が参加。京都YMCAリトリートセンターを会場に9月15～16日、川遊びやキャンプファイヤー、野外クッキングなどを楽しみました。

この輪はすでに京都YWCAや近隣のミッションスクールにも広がり、「次はもっと大規模な市民クリスマス会を開きたい」と企画が進められています。宗教にまつわるトラブルや争いなど、とかく敬遠されがちなキリスト教会ですが、本来の宗教がもつ長所や必要性まで失われることのないよう、YMCAのリソースを用いて協働していきたいと思っています。



京都YMCA 藤尾 実